



産科医の経験とホスピスケア (4)



医療法人パリアン理事長 川越 厚

トータルペイン

出産には陣痛がつきものだ。子宮収縮に伴う痛みなので、Total pain の考え方によれば肉体的な痛み

(Physical pain) ということになる。陣痛と胎児の心拍数は、分娩の進行状況や胎児の生命の危険などを診断するうえで、非常に重要な情報を与えてくれる。産科医は分娩が終了するまで、分娩監視装置という器械を用いて両者をモニターする。産婦にとってはえらく迷惑な代物であるが、これも新しい命を無事この世へ送り出すためだと思って、我慢しなければならない。

陣痛は紛うことなき肉体的な痛みだが、その他の複雑な要因が絡んで産婦を苦しめる。たとえば激しい痛みが繰り返し産婦を襲うので、彼女は「いつまでこの痛みが続くのか」という、心理的な不安を抱くことになる。それが痛みを増幅させるわけだが、混乱状態と診断した医師は時に精神安定剤を投与することもある。因みに、助産所や自宅での出産では原則として一人の助産師が最後まで産婦に寄り添うので、産婦の心理的な痛みはかなり軽減される。

痛みは単なる肉体的な苦痛ではないことを、陣痛を見ていて僕は漠然と理解していたが、トータルペインの他の要素、すなわち社会的 (Social) な要因やスピリチュアル (Spiritual) な面などに思いを馳せることはなかった。たしかに妊娠・出産は、経済的な問題を切り離して考えられない。しかし、こと陣痛が繰り返し産婦を襲ってくる時に限って言えば、社会的な要因はまず問題にならないだろう。様々な困難を乗り越え、最後の仕上げとして訪れる出産のとき。それが祝福されたものでなくて、なんだろう。陣痛に社会的な要素が絡むことなどありえない、と能天気僕はそう考えていた。

医師になって1年半が経った頃、僕は港区のとある周産期センターで研修することになった。

場所柄だろうか、受診する患者には外国人や富裕な女性が多かった。これは当直をしていた、ある夜の話である。

準夜勤務の助産師が廊下の窓際に僕を連れて行き、「先生、あの女の人を見てください。先ほどから病院の周りを行ったり来たりして、怪しい動きをしています。」と言って、一人の女性を指差した。そこには、身なりのきちんとした中年女性が時折こちらを見上げながら立っていた。その最中、50歳代と思しき紳士にエスコートされた30代前半の初産婦が陣発 (陣痛が発来すること) のため入院してきた。やや痩せ気味の、目鼻立ち



の整った美しい女性であったが、なぜかその表情は暗く硬かった。男性の方も言葉

少なく、これからめでたい時を迎えるような雰囲気はまるでなかった。外来カルテの夫の氏名欄は空白だった。

陣痛が本格化すると、彼女は歯を食いしばりながら繰り返し押し寄せる痛みを耐えていた。他の人を寄せ付けないオーラが彼女を包み、声をかけるのも憚られた。僕にとっては、初めての不思議な出産場面である。自分の居場所を求めて、戸惑うばかりだった。ふと気づくと、先ほどの紳士は陣痛室から姿を消していた。窓の外に怪しい女性の姿もそこになかった。

出産そのものは軽かったが、赤ちゃんの誕生を共に祝う喜びはそこになかった。分娩記録を書いていた僕に、助産師がそっと教えてくれた。「先生、彼女は近くの繁華街の高級クラブでホステスをしているのですって。」

「どおりできれいなわけだな。すると、病院の外にいたのは彼の奥様？」

(2ページにつづく)

(1ページから)
「彼を彼女に近づけないように、見張っていたらしいですよ。」
その時の話はそれまでである。陣痛がまさにトータルペインであることを認識するようになったの

は、ホスピスケアに携わるようになって、しかも最近のことである。それまで、あの産婦が経験した、Social な痛みをベースにした Spiritual な産みの苦しみを僕は理解できなかった。
(次号に続く)

パリアンボランティアの平岡さんが遺族体験談を発表

10月2日 墨田区主催の遺族ケア研修会開かれる

墨田区主催 (NPO法人すみだ在宅ホスピス緩和ケア連絡会あこも 企画・運営) の平成26年度墨田区在宅緩和ケア事業、遺族ケア研修会が平成26年10月2日 (木) 午後6時~8時、すみだリーパーサイドホール1階会議室で約40名が参加して開催された。

研修会は、長野大学社会福祉学部特任教授・萱津公子先生の「大切な人を失くした家族へのケア・グリーフケアの意義と支援者としての関わり方」と題する基調講演とパリアンボランティアの平岡達夫さんによる「妻を家で看取った体験談」のあと、参加者との意見交換をして終了した。



遺族ケア研修会で講演する萱津先生

長野大学特任教授・萱津公子先生「大切な人を失くした家族へのケ

萱津先生の講演は、39歳でご主人を失くされ、小学生だった子供を育てたご自身の体験や、15年間勤められていた長野県の特別養護老人ホームで看取った方の家族や福祉職・介護士の体験などを交えながら、日本のグリーフケアの話をされた

遺族ケアで大事なことは、亡くなったからといって、そこで関係を完全には切らないで、見守るとのことだといい、萱津先生は1年後の茶話会や手紙を書くこと、遺族が同席するデス・カンファレンスを実施しているという。パリアンでは、看取り後1年の遺族との分かち合いの会「メモルの集い」や「命日カード」、毎月の「デス・カンファレンス」を以前から実施して、萱津先生が提唱する遺族ケアの基本を行っている。



長野大学特任教授
萱津公子先生

これから多くの方が亡くなっていく。言葉のかけ方ひとつでも、この人は私のことを心にかけてくれているという思いが遺族を支える。私達は死別悲嘆者の人達に寄り添うということを考えていきたいと講演を締めくくった。

パリアンボランティア・平岡達夫さん「妻を家で看取った体験談」

平岡達夫さんの体験談は、奥様が病院での治療を終えて家に戻ってきた時期、亡くなった日と通夜・葬式の日、それから今日までと、3つに区切って話された。

本当に在宅で看られるか不安であったが、川越先生のお世話になったこと、会社が休職を認めてくれ協力してくれたこと、義母がずっと泊り込んでくれたことで、やり遂げられた。

子供達には病気の告知はしていたが、「病状がだんだん悪くなっているのはわかってはいたが、家で亡くなるとは思っていなかった」ということを、最近、子供達から聞いて知った。最期が近づいていることを子供達もわかってきているという自分の思い込みを反省し、また、息を引き取る瞬間に子供達と立ち会えなかったことについて、子供達から「お母さんは最期に僕たちを見たかったと思う」と言われ、会わせてあげなかったことを反省したという。



パリアンボランティア
平岡達夫さん

意見交換では、亡くなる時にそばにいらなかったことに悩む家族は多いという話があった。また、妻の末期がんを子供に告知しなかったことで、「治るんじゃないの」とあとで責められた父親の話、妻を病院で看取った夫が、在宅ケアを妻の両親に猛反対されて実現できなかったことや妻に余命告知しなかったことで、本人の好きなように生きる選択権を与えてあげられなかったことへの後悔の念を述べていた。

ケース・カンファレンス 「主介護者（夫）への必要な関わりについて」

訪問看護パリアンでは、月に1回程度ケースカンファレンスを開催している。

先月は、自宅で最期を迎えることを希望している女性患者のケースで、夫が緊急時の対応の不安や、このまま家で看ているのか、PCU（緩和ケア病棟）に入院した方がいいのかという迷いを抱えていることに対して、看護師がどのように関わっていけばよいかについて、様々な意見が交わされた。



ケースカンファレンス風景

特別講義は小田豊二先生をお招きしての「聞き書き講座」

10月11日 第3回ボランティアの集い開かれる



聞き書きの講演をする
小田豊二先生

平成26年度第3回ボランティアの集いは平成26年10月11日（土）午前9時30分～12時30分、パリアン研修室で15人の参加者により開催された。

最初に、昨年墨田区主催で開催した「聞き書き講座」講師の小田豊二先生をお招きして、聞き書きの特別講義を行った。通常2、3日に分けて行う講座を2時間30分に短縮していただき、聞き書きのエキスを伝授してくださいました。「誰でもできる聞き書き入門」と題して、小田先生の楽しくて匠な話術によりわかりやすく解説され、「聞き書きとは何か」から始めて、話の聞き方、聞き書き体の作り方、製本の実技まで細かく指導してくださいました。

聞き書きの模擬練習とその場での一人ひとりへの添削指導により、聞き書きの概要は理解できたと思われる。

後は実際に聞き書きを実践してくれることを期待する。小田先生は、聞き書き講座の受講者には添削指導を無料で行ってくださるので、出来上がったら、是非見てもらいたいかがでしょうか。

特別講義終了後、各ボランティアグループが第2四半期の活動報告、第3四半期に向けた活動計画を話し合った。サロンド・パリアングループでは、ケーキ作り講習会を10月、11月に実施する。また、手作りグループは、クリスマスプレゼントの製作に入っており、お手伝いできる方を募集しているとのことだった。11月の手作りの活動日は18日（火）午後1時から。



真剣に聞き入る受講生たち

私たち、パリアンの緩和ケア訪問看護師です



訪問看護パリアンの看護師たち

パリアンの在宅ケアを受けている患者さんであれば、緊急コールには、24時間365日いつでも対応します。医師からの事前約束指示のもと、痛みがあれば痛みをとるための対応をします。最期のときを過ごす患者さんご家族をチームで支えます。そして家で最期を迎えたいと希望されれば、家での看取りをお手伝いします。

現在は13名の看護師（うち常勤が9名）がいて、中にはがん専門看護師や緩和ケア認定看護師もいます。そして家で療養する患者さんやご家族の生き様から多くのことを学ばせてもらっています。看護師同士や他の職員と助けあいながら、訪問看護を続けていきます。

NHKの「プロフェッショナル・仕事の流儀」に川越院長が出演

11月17日放映予定のNHK総合「プロフェッショナル・仕事の流儀」《いつか、喜びの涙に変わるように～在宅ホスピス医・川越厚～》にクリニック川越院長、川越厚先生が出演する。

この番組は、平成18年から始まり、今も「旬の仕事人たち」が次々に登場する番組で、時代の最前線で活躍するその道のプロを取り上げ、彼らがどのように発想し、斬新な仕事をどう切り開くかを、徹底した現場密着ドキュメントで描いている（NHKの「プロフェッショナル・仕事の流儀」ホームページより）。

今年8月から1か月余り、NHKのスタッフ3名が川越厚先生に密着取材し、月曜から土曜まで、朝のミーティングから始まり、相談外来、訪問診療、カンファレンスなどカメラの入らなかったほどだ（診察などの撮影は事前承諾済みの場合のみ）。どのシーンが放映されるか、見てのお楽しみ。

11月17日（月）午後10時から、NHK総合で放映予定。この番組をみて、パリアンの新しい発見をしてみたい。



朝のミーティングを撮影する「プロフェッショナル・仕事の流儀」のNHKスタッフ

10月17日20日、ケーキ作り講習会開かれる



患者さんと医師、看護師、ボランティアなどと語りながら食事をするサロン・ド・パリアンでは、食事のあとに出るデザートが好評だ。現在はボランティアの野本さんが作成を一手に受け持っているが、今後、デザート作成の担い手を増やそうと、ケーキ作り講習会を計画した。

10月は、17日と20日に講習会が開かれ、17日は5人が参加し、フルーツタルトとトライフルの2種類のケーキ作りにチャレンジしていた。

20日は参加者2名で、トライフルとシュークリームを作った。

次回のケーキ作り講習会は、11月17日（月）午後1時45分からで、作るケーキは「ティラミス」です。参加希望者は、パリアン・江口まで、E-MAIL、FAX、電話で連絡ください。

11月のボランティア活動予定

- ・ボランティア講座：11月29日（土）午前10時～15時
- ・訪問ボランティア：11月は休会
- ・サロン・ド・パリアン：11月7日、14日、21日、28日
- ・手作りボランティア：11月18日（火）午後1時～3時
- ・事務ボランティア：11月8日（土）午後1時～
- ・ケーキ作り講習会：11月17日（月）午後1時45分～



芝田さん提供の花々

編集後記

第3回ボランティアの集いの特別講義は、昨年5、6月に墨田区主催で行った「聞き書き」をパリアン独自企画で10月11日、実施した。講師はもちろん、「聞き書き」の大御所の小田豊二先生◆普通は最低でも2日コースのところ、2時間30分の超短時間講座を引き受けてくださった。内容を絞りに絞ったエキスだけの講座で、どのくらい理解できるのか心配したが、参加者の熱意で、用意した「会話」を「聞き書き体」に直す練習問題は、小田先生に即座に添削していただいた結果、全員が「花丸」をもらうことができた◆全国で「聞き書き」という方法、技術を通して、病院や高齢者施設、在宅介護の現場で福祉活動やボランティア活動が行われている。パリアンでも、この「聞き書き」を活用して、患者さんの話を聞いて、ご本人の自分史作りの手伝いや遺族への思い出作りに貢献できると確信している◆そういうことで、「聞き書きボランティア」を新しく作って活動しようと動き始めた。小田先生も、3年間の無料添削指導サービスで協力してくれる。今回の講座を契機に、興味のある方は、一緒に活動してみませんか。（I. E）

在宅ホスピスボランティア講座受講生募集



私たちと一緒に活動しませんか？



ボランティアグループパリアンは、最期のときをご自宅で過ごしたいと願うがん患者さんや家族の暮らしを、パリアンのスタッフと共にチームで支えます。在宅ホスピスケアのボランティアとはどういうものなのかを広く知っていただき、パリアンでボランティアとして一緒に活動しませんか？

《パリアンの活動についてはホームページやブログをご覧ください。 クリック》

■対象 **在宅ホスピスケアに興味があり、
ボランティア活動を希望する方**

■日時 **平成26年11月29日（土）10：00～16：00**

■会場 **医療法人社団パリアン**

（東京都墨田区立川 2-1-9 KHハウス 1階研修室

■講座概要 **1 パリアンの在宅ホスピスケアについて
2 チームケアとパリアンボランティアの活動紹介**

■募集人員 **10人（先着順で定員になり次第、締切ります）
《応募いただいた方には事務局からご連絡いたします》**

■受講料 **500円（資料・昼食代として）**

■申込締切日 **平成26年11月22日（土）【必着】**

■申込方法 **氏名、性別、年齢、住所、連絡先を記入の上、下記
申込先にFAXまたはメールにてお申込みください。**

■申込先・問合せ先 **医療法人社団パリアン ボランティア講座事務局
FAX：03-5669-8310/TEL：03-5669-8302
e-mail：volunteer@pallium.co.jp**

がんサロン SAKURA

がんサロンSAKURA(さくら)は、がん患者さんとご家族が、体験や悩みを分かち合い、よりよく日々を過ごせるよう支え合う場です。毎回、医師など専門家によるミニ講義を行います。また、個別の相談もお受けします。どうぞお気軽にご参加ください。

日時:平成26年11月8日・22日・29日、平成27年3月14日
いずれも土曜日 午後2時～4時

※一部の回のみ
の参加も可能です。

会場:すみだ女性センター(墨田区押上2-12-7-111) 3階 第2・3会議室
「押上駅」A3出口徒歩5分・「とうきょうスカイツリー駅」徒歩7分

対象:がん患者さんとご家族(患者さんのみでも参加できます)

プログラム

I. ミニ講義(約20分) ※内容は一部変更になることがあります。

11/ 8 「がん」とはどんな病気? (東京都立墨東病院院長 梅北信孝先生)

11/22 「がん」にやさしいお食事 (賛育会病院栄養科 山本由紀氏)

11/29 がん患者を支える社会資源(都立墨東病院がん相談支援センター 田中寛子氏)
(3/14は、専門家を交えた語り合いの時間を予定しています)

II. 語り合い

参加者の皆さんが、がんの体験や悩みを語り、「がんと共に生きていくこと」を考えます。

III. 個別の相談 ご希望の方はお申し出ください。

参加費:無料 **定員:**先着20名(各回)

申込み:各回開催日5日前までに、お名前(同伴者がいる場合はその方のお名前も)・住所・電話番号・参加希望日を、下記申込み先へご連絡ください。

※裏面にFAX用の申込み用紙があります。

※定員(各回20名)に達しましたら締め切らせていただきます。

お申込み・お問合せ先

企画運営:**NPO法人すみだ在宅ホスピス緩和ケア連絡会あこも**

TEL 03-5669-8302 / FAX 03-5669-8310 / E-Mail s-sumida@pallium.co.jp

共催:東京都立墨東病院・社会福祉法人賛育会賛育会病院 主催:墨田区

平成26年度墨田区在宅緩和ケア事業 がん相談会

がんサロンSAKURA(さくら)

FAX用申込み用紙

参加ご希望の方は、この申込み用紙にご記入の上、FAXするか、
同じ内容をメールでお送りください。

FAX : 03-5669-8310

E-Mail : s-sumida@pallium.co.jp

参加希望日 (該当部分に ○をつけてください)	全回参加 一部参加 (参加希望日に○をつけてください) 11/8 ・ 11/22 ・ 11/29 ・ 3/14
お名前 (患者さん)	
住所	
電話番号	
同伴者のお名前 (参加の場合のみお書きください)	患者さんとの 続柄 _____
このがんサロンを何で お知りになりましたか？	

※お送りいただいた個人情報は、当事業関係のみに使用させていただきます。

会場のご案内

すみだ女性センター
(墨田区押上2-12-7-111)
3階 第2・3会議室

「押上駅」A3出口徒歩5分
「とうきょうスカイツリー駅」徒歩7分

